

樹木は大きく育ちます。その大木を見上げると、天に伸びる枝葉に圧倒されることが度々あります。大木になるまでに何十年または、百年以上も風雨に耐えてきたことになります。

長い年月、風雨に耐える大木を支えるのは、根が重要だと思っています。広がる枝葉と違い、目に見えない根の存在はあまり注目されませんが、とても重要な役割を果たしています。根は地中に広がり、成長に必要な養分や水分を吸収する役割と、樹体を支える2つの役割を持った重要な器官です。

そんな重要な器官であるがゆえに苗木を植える際、根が地表に出ないように深く植えている現場を目にすることが多くあります。木をいたわって植えていることは分かりますが、残念なことに多くの場合、このような木は、あまり元気がないように見えます。原因として、根の酸素欠乏が考えられます。植物は、緑の葉で炭酸同化作用（光合成）を行い、大気中の二酸化炭素から炭素を吸収し、酸素を放出することが知られています。また、枝葉や幹だけではなく根も生きている証として、酸素を吸収し二酸化炭素を放出しています。

街路樹のサクラ並木で歩道の舗装がでこぼこになるのは、サクラが育つ過程で、根が空気を求めて地表近くで発達するために起きる現象です。また、街路樹などの樹勢が弱くなる要因の一つは、人が木の周りを歩き回ることや車の通行で地面の土が踏み固められることで、地中の根が呼吸できなくなることが挙げられます。樹木に限らず植物は、自分で移動することができず、植えられたその場で根を張り、生きて行かなければならない宿命があります。そこで、植樹するときには、根も酸素が必要だと考えながら、根と幹の境で浅く植えて、根が呼吸障害を起こさないように心掛けてください。このとき、風雨などで倒れる心配がある場合は、支柱などで支えてください。根が広がれば支柱の必要はなくなります。(杉野)

